

E. 妊娠中毒症における栄養管理・薬物療法に関する研究

福田 透 (信州大学医学部産婦人科)
高木 繁 夫 (日本大学医学部産婦人科)
須川 信 (大阪市立大学医学部産婦人科)
中山 道 男 (琉球大学医学部産婦人科)

研究目的

妊娠中毒症(中毒症)については、数年前より日本産科婦人科学会(学会)の中毒症問題委員会で見直しが進められつつある。その結論をふまえて、学会としての新たな中毒症の管理・治療指針が作成され公表の予定となっている。

中毒症の対応については、現在も尚本態が不明なことから多くの問題点が残されている。しかし、その病態生理についての各面よりの研究により次第に2つの病態が中毒症の3大症状の基盤となることが確認されるに至った。すなわち、①水、Naの過剰蓄積が浮腫につながることで、②心、血管系におけるVasoconstrictionが高血圧や蛋白尿につながることで、である。

これらの異常状態を栄養管理と薬物療法により、如何に改善或いは防止するかが本研究の目的である。

研究方法

研究協力者並びに全国主要医療施設の協力のもとに、現時点における中毒症の栄養管理と薬物療法に関する見解をまとめ、更に新たに問題となしつつある諸点につき解明を行ないつつある。

今回は第1年度であり、まず全国の主要施設における中毒症の治療の現況につきアンケート調査を実施し、93施設中59施設(63%)より得た回答につき分析を行った。

更に栄養管理については、学会の栄養代謝問題委員会(委員長 須川信教授)で成案化を急ぎつつある中毒症栄養管理指針につき検討を進めた。

研究結果並びに考察

① 栄養管理について

昭和54年に改訂された日本人栄養所要量(厚生省)に準拠し作成した中毒症栄養管理指針(案)に対し寄せられた各種意見について検討した。そ

の結果、塩化ナトリウムの摂取量を日常摂取時の2/3(案は1/2)にすることをはじめ、エネルギー制限の必要性についての医学的根拠について考究した。

更に妊産婦の管理(うち中毒症が8~13%を占める)が大病院から診療所に至る施設で実施されており、助産婦、保健婦の協力を広く得ることが必要であることから、栄養管理が普及する様、指導要綱(案)の作成を実施した。

② 薬物療法について

今回のアンケートの分析成績でも、また近年の諸報告をみても、3大症状のうち最も重視すべき症状は高血圧であることが明白である。浮腫が安静と食事療法により大部分が消失し、また蛋白尿に対しては特効薬の開発されていないことから、中毒症の薬物療法の主対象は高血圧に対する薬剤と鎮座・鎮静剤とに焦点をあてるべきことを再確認した。

妊婦に対する薬物療法に関しては、母体のみでなく、胎児や胎児付属物(特に胎盤)に及ぼす影響を十分に考慮すべきことは云う迄もないところである。更に中毒症々状のかかなりのものが分娩終了後には日数と共に自然に消失する事実も重視すべきものがある。従って例えば降圧剤の使用に際しても、一般の内科などで実施されている高血圧管理(高血圧性心疾患及び関連疾患の予防や悪化阻止が主眼)とは異なるべき点に留意が肝要である。今回実施したアンケート調査でも、薬物療法については、かなり見解を異にする傾向が認められた。

まとめ

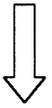
以上、第1年度の成績概要につき記述した。次年度以降では、①栄養管理については管理指針の徹底と指導要綱の完成。②薬物療法については現時点における適切な薬剤の選択と使用基準の検討、

更に新たに導入されつつある薬物療法（ヘパリン シウムなど）についての研究と考察を進める予定療法など）や見直されつつある薬剤（硫酸マグネ である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

妊娠中毒症(中毒症)については、数年前より日本産科婦人科学会(学会)の中毒症問題委員会で見直しが進められつつある。その結論をふまえて、学会としての新たな中毒症の管理・治療指針が作成され公表の予定となっている。

中毒症の対応については、現在も尚本態が不明なことから多くの問題点が残されている。しかし、その病態生理についての各面よりの研究により次第に2つの病態が中毒症の3大症状の基盤となることが確認されるに至った。すなわち、水、Naの過剰蓄積が浮腫につながることで、心、血管系におけるVasoconstrictionが高血圧や蛋白尿につながることで、である。これらの異常状態を栄養管理と薬物療法により、如何に改善或いは防止するかが本研究の目的である。